山梨新報「直言」原稿

平成十五年十一月二十八日

「リクルーティングが大事」

山梨大学　副学長　伊藤　洋

「泰山鳴動して鼠一匹」とは、前ぶれの騒ぎばかりが大きくて、実際の結果の小さいことのたとえ（『広辞苑』）。第四十三回総選挙にかけた大向こうの興味・関心は、なんと言っても「政権交代」だった。かげりも見えてきた小泉人気を安倍人気で補強した三党連立内閣に、対する新民主党のマニフェストがどれ程の底力を見せるかであった。しかし結果は「鼠一匹」。民主党の躍進はあったというものの、与党は絶対安定政権と化した。わけても、山梨県内では選挙戦自体が盛り上がりを欠き、投票率も伸び悩み、政策論争も不発のままに終わった。結果的に、今後に変革を予見させるものすら残さないまま、泰山鳴動しただけで幕を閉じた。

こんなことになった主因は、候補者選考につまずいたためであろう。一区における自民党の「落下傘」候補擁立、二区における民主党の「不戦敗」、三区における民主党候補の立候補までの訳の分からない迷走行動、などがその代表例である。

しかし、もっと根本的な構造欠陥がある。各政党の候補者選定のプロセスが、あまりにお粗末な前近代的システムでしかないということだ。

自民党では、この政党の遺伝子の中に、明治二十三年国会開設当時の古色蒼然たる遺伝子が未だ脈々と残っているようだ。すなわち、地主・酒屋・名主等々ムラ型社会の素封家の出自で、政治をお家の業とする「世襲制」である。

ここへきて、その世襲制がシステム疲労をきたしているというのに、それ以外のリクルート手段を開発できずにいたことのツケが今回一区に生じたのであろう。

他方、民主党では相も変らず労働組合またはそのナショナルセンターの集票力に期待しているから、候補者選定もこれに支配される。結果的に、ここでもリクルート機能が未成熟のままだ。

つまり、この国の二大政党？には、国民政党というのなら当然具備すべ

き民主的でオープンな候補者選定のアルゴリズムが存在しないのであるが、それなのに、これらが二大政党だというこって政権を争っているところに、この国の政治的不孝が潜在しているのである。

筆者の尊敬する友人の一人Tさんは、売り上げ数百億円の中堅企業の社長であった。Tさんも含めて、彼の会社は創業以来T家の家長がCEOを独占してきた。会社内の重要ポストもほとんど血縁関係者が占めた。その血の結束は熱く、固い。血縁ゆえに以心伝心、上意下達の命令の流れの良さ。それらがこの会社の成長力の源泉であり、世襲制こそ企業経営の成功の要諦だとTさんは確信していた。

しかし、今次の不況には耐えるすべがなかった。石をもて追われるように、この優雅な一族は経営陣から一掃されてしまった。

もう一人の友人Fさん。彼も、同じように世襲制を続けてきた同族企業の何代目かの社長だった。しかし、自分を最後に世襲制を廃止した。彼は、T家の継者をスカウトし優秀な後継者に経営を委ねて自らは資本家代々が投下した。その回収すべき作戦に変えた。その結果、社業は確実に伸長していった。

T家が繁栄できたのも、F家が代々世襲できたのも、一族の血の優秀さでもなければ、結束の熱さや固さでもなく、日本社会全体がマスとして右肩上がりの成長を続けていたからであった。

新しい血や知が供給されなかったTさんの会社は、パラダイムの変化に対応ついて行くことも、デフレ不況の暗闇に飲み込まれていったのである。

他方、Fさんの会社は、常に経営層の若返りを図りながら、企業体質を強化して、ついに上場企業へと脱皮した。Fさん自身は慈善事業に情熱を注ぎ、高い社会的評価を得ながら、悠々自適の生活を送っている。

さて、再度政治の話に戻ろう。上述の例に照らしてみると、自民党も民主党も、大別して自民党類型に分類される。分けてTさんも自民党は、代々直系の長男に跡を取らせている例であり、民主党は血縁ではないが、労働組合という閉じた組織＝「地縁」が占有している。

こういう前近代的政治システムが、永世与党と万年野党を平和裡に共存させてきた。政治改革を成遂げるには、広く人材を集めるシステムを作り上げなくてはならない。

鼠でもなく、山が動くものを見たいものだ。